

特定非営利活動法人  
自然文化誌研究会 会報誌

157号

2025年1月20日発行号

## 便所の中で考えた年始のご挨拶

自然文化誌研究会 副代表理事 小川泰彦（おがわやすひこ）

副代表理事という大役を仰せつかりながら、ほぼ何もしないばかりか音信不通ともなれば、事務局長様のお怒りを買うのはもっともなこと。電話にて「年始の挨拶文ぐらいよこせ」と言われれば、断れるはずもなく、久方ぶりの登場と相成った。

わたくしについて、知っている人も少なくなっているであろうと思うので、軽く自己紹介させていただく。前I NCH事務局担当、前教員、現無職。温かな性格で人当たりがよく色男ではあるが、いい加減で自堕落、賭け事を好み少々破滅的な性分が災いして残念な男というありがたい評価を受けることが多い。若いころから遊びまくっていて社会からドロップアウトしそうなところを、拾ってもらったという恩義がこの会にはある。

本会は今年でなんとびっくり創設50周年を迎える。敦盛よろしく夢幻の如くなり。野外環境教育のパイオニアという会の位置づけのもと、そこに関わってきた方々は学者や教員・会社員・職人さん、飲んだくれや博打打ち含めまったくもって多種多様で、みんながそれぞれの思いを持って関わってきた。まさに昨今の多様性という言葉を会自体が体現してきたとも言える。人の思いでつながった会は、得てして時間がたつと人が変わり思いが変わり、時代の流れとともに衰退していくことが多い。そんな中、いまだにしぶとく活動が続いているのが、本会のすごいところだ。若者たちとのパイプ役をしてくれる事務局の働き、参加者やメンバーの子供が大きくなって新しいメンバーに加わってくれることなどが大きな要因であることは確かだが、それだけではないと思う。関わり方の熱量の差がそれぞれにあっても、それをゆるくつないでいけるところか。あたくしのようなちゃんぽらん人間も受け入れてくれる寛容さがあるからか。

会が50年も続けば、活動のコアであったりサポートをしてくれたりしたメンバーの訃報に接することも。一緒に活動し、一緒に笑ったり語り合ったりした記憶をたどれば、懐かしく思うと同時にちょびっと目頭が熱くなる。亡くなった方々がうちの会に残してくれた足跡や思いはできる限りつないでいきたいものだ。そんな方々はきっと空の上から「50年も続いてんの!」「頑張ってるなあ」と眺めていてくれるんだろう。そして、あたくしもこの世を旅立った後、空の上から「まじか!」と眺める日が来るのかなあ。

### 『第21回 NPO法人 自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004年に東京都の認証を受けてから、第21回目の総会を行います。昨年に引き続き、オンラインでの開催としました。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などもお気軽にお寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時：2025年2月17日（月） 19:00開始～21:00終了予定

場所：ZOOMでのオンライン会議

議題：①2024年活動報告・収支報告 ②2025年活動計画・収支予算 ③役員を選出 ④その他

\*出席される方にはzoom会議のURLをお知らせしますので、2月7日までに事務局までご連絡ください。

## 『冒険学校まふゆのキャンプ2024』報告

## ～これでよかった初村長～

鈴木風馬（自然文化誌研究会 運営委員）

2024年12月27日～2024年12月29日の3日間、小菅村「清水バンガロー」で開催した「冒険学校 まふゆのキャンプ」の報告をします。

今回私は、参加者時代から長らく参加してきたINCHのキャンプで、初めての「村長」ということでやらせてもらいました。「村長」に対する思いとしては、やはり自分にはまだ早いのではないかとは思っていましたが、ここで経験しておかなくては一生やらないだろう、この先もINCHに関わる身としてはぜひ経験しておきたい、と思っていました。始まるまではかなり緊張していましたが、始めてみるとやることはいつものキャンプと同じプラスでミーティングや始まり終わりでしゃべる、そしてとにかく子どもたちと一緒に遊んで自分も楽しむ、そしてそれが楽しいというところに尽きました。

まふゆのキャンプは毎回夏来た子達が冬も来ることが多いので、みんな勝手がわかっています。子どもたちもあれがやりたいこれがやりたいということで、火遊び、薪割り、工作、ブランコ、星空、野鳥、シーソー、乱闘、餅つき、滝見と盛り沢山でした。私もたくさん子どもたちと遊んで、いつものキャンプと違って「村長」ということで少し子どもたちとの関わり方の意識が変わったかなと思います。手加減を知らない子どもたちと向き合って安全に振りつつ自分も全力で遊ぶというのは案外難しく、どうしても見守りになったり、子どもたちも飽きてしまったり、羽交い締めにされて怪我をしかけたりしました。そんな中でも興味を引くコツを掴んで、どうやってコミュニケーションを取って、子どもたちのやりたいことを汲み取って、それを一緒に形にするとかに楽しいかということを確認できたと思います。後半になると、子どもたちも自然と「村長、村長」と呼んでくれて、認められたような気がして、緊張もほぐれて、認められたのかなと思って嬉しくなりました。いつのまにやら子どもたちも仲良くなっていて、「大乱闘ヤミーズ」なる組織ができたり、ずっとお風呂を炊いてくれる子がいたり、ブランコを全力で押ししたり、肩車をしたり、ペットボトルと木で水車を作ったり、シーソーをちゃんとしたものに作り替えたり、滝で氷の盾(連続した氷柱の塊)を獲得した子どもがいたりしました。最後、武蔵小金井駅解散まで一緒に行って、バスの中で疲れて眠っている子どもたちを見て、全力で遊ぶと疲れるよね、楽しかったよねと思えてよかったです。来てくれたスタッフの皆さん、運営チームの皆さん、全力で準備してくれた皆さん、片付けに協力してくれた皆さん、本当にありがとうございました。今後のキャンプもぜひよろしくお願いします。



←スタッフの佐々木正久さんのYouTube「まー君のナチュラルフ」で、「冒険学校まふゆのキャンプ」の活動の様子が観られます！！  
(チャンネル登録よろしくお願いします)



## 宮本茶園 宮本透

明けましておめでとうございます 2025年もよろしくお願ひいたします

2024年は1月に東アジア反日武装戦線の桐島聡さんが重体で病院に搬送されたというニュースが流れ、12月には韓国のユンソンニョル大統領が出した戒厳令に対し100万人の労働者市民が決起してクーデターを粉砕する闘いが報道されました。1958年生まれの私は高校・大学時代「しらけ世代」と言われ「無気力・無感動・無関心」の三無主義生活を送りました。私が学大で過ごしたモラトリアムの時間、1970年代学生運動・1980年光州蜂起になぜ若者が立ち上がり闘ったのか考えた事は社会の理不尽と対決する人生を歩むきっかけとなりました。

藤沢で生まれ育った私は家庭を持っていた時代江ノ電沿線に居を構えていましたが、桐島さんが潜伏生活を送っていた一軒家は自宅から数百mしか離れていなかったのです！秋の彼岸に故郷を訪ねて聖地巡礼、上岩花卉畑で育てた生花を彼の終の棲家に手向けました。高校生の頃から通った駅前の喫茶店に立ち寄り、コーヒーを飲みながらおしゃべりすると「内田さんはうちの常連さんだったのよ、とにかく陽気な人だった」と彼の思い出話を聞く事ができました。死の3日前まで「内田洋」のペンネームで闘い抜いた桐島さんの哀しい49年間に合掌。

新聞・TVを見ない私の情報源はPC・スマホですが、ネットニュースやYouTube動画で配信される韓国情勢に感動しました。銃で武装し国会内に入り込んだ戒厳軍兵士に対し、銃口を向けられてもひるまず抗議する人々の闘いはわずか6時間で戒厳令を粉砕したのです。「光州5・18」・「タクシー運転手」・「1987」、韓国映画に描かれる民主化闘争の歴史は現実なのだ改めて認識する事ができました。8兆円の軍事費に空母を保有するに至った日本は中国侵略戦争に突き進んでいます、今こそ憲法9条の意味を私たちは深く考えるべきだと思います。

### ・秋の茶仕事

昨夏は7月に熱中症を患ってから炎天下での野良仕事を控えていました。8月下旬は雨続きで茶園管理作業が遅れ、徒長枝処理が終わりません。夏整枝後に伸びた徒長枝は旧盆過ぎに1人用バリカンで刈ったのですが、現在は体力が衰え2人用刈り機で作業しています。しかしながら赤字経営の宮本茶園は整枝・摘採作業同様のアルバイト代は払えず、ボランティアに頼っています。無償で茶園管理作業を担ってくださるボランティアは貴重な存在で、9月7日は朝から上岩茶園での作業をお願いしました(写真①)。この日の天候は厳しい残暑でしたが湿度が低く、作業効率が上がったので昼食後も徒長枝処理を続けました。午後になると手足が痙攣したのですが、どうにか予定した茶園の作業を終わらせて15時頃ボランティアと別れました。軽トラを運転して道具を片付けようとしたのですが熱中症の痙攣は治まらずハンドルが握れません。日陰で安静にすれば症状が和らぐかもしれないと考え、車を降りて木陰に入ったのですが手足は硬直し嘔吐症状まで出てしまいました。このまま意識が無くなると命にかかわる深刻な事態だと認識し、近所に住む高村師へ携帯電話で助けを求め上野原市立病院に救急搬送されました。病院では医師から「腎機能が著しく低下しているので、夜になっても尿が出なければ入院ですよ」と言われ、点滴を受けました。ずっと付き添ってくださる高村師は「宮本さんは手広くやりすぎ、年齢相応にできる事とできない事を整理しないとイケない」と諭します。茶・雑穀・花卉と同時並行で栽培してきましたが、2回目の熱中症は一人で8反5畝を耕作する事は不可能だと認めざるを得ませんでした。

残暑が和らぐと相模原市役所から連絡があり、10月4日に環境経済局長・緑区長を含む幹部職員の県茶品評会入賞茶園視察が行われました(写真②)。相模原市内足柄茶生産農家の受賞は久しぶりで、市役所幹部の皆さんは茶草場農法で栽培する大河原茶園・宮本茶園の入賞を祝福してくださいました。入賞祝いに浸る間もなく8日は県農業技術センターの茶園巡回指導と藤野茶業部会、普及員の先生とJA本店職員同行で部員の全茶園を視察した後に第57回神奈川県茶園共進会出品茶園選出を話し合いました。2021年に中切り更新した上岩茶園が選ばれ、2020年度共進会2等賞の大河原副部長に秋整枝作業を指導していただき出品準備に取り組みました(写真③)。



## ・佐野川茶営業活動

10月に開催された藤野茶業部会では佐野川茶販売計画を話し合いました。私は上岩茶園で収穫した荒茶を全量佐野川茶製品に加工にするつもりでしたが、前年までの販売量を踏まえると売れは難しいのではないかという議論がなされました。会議後茶来未社長に相談すると「宮本さんはどうして売る努力をしないのですか！がっかりしました」ととがめられ、この指摘は胸に突き刺さりました。自分の人生を振り返ると勉強でも趣味でもやり抜く努力をせずに挫折して、我慢できずに逃げ出す事ばかりでした。望んでなった茶農家、健康寿命が尽きるまで茶園管理作業と併せ営業活動に全力で取り組む不退転の決意を持ちました。

ほうじ茶製品を復活させて秋のイベント藤野ふる里まつりとシュタイナー学園のまるまるマルシェに出店しました(写真④⑤)。佐野川茶製品は試飲された多くのお客様から「今年のお茶はとても美味しいわ」と誉めていただき、相模原ブランド構築の手ごたえを感じました。10月31日は横浜で開催されたかながわ農林水産品マッチング商談会に参加し、様々な食品流通企業のバイヤーに佐野川茶製品を紹介しました(写真⑥)。残念ながら契約に至った企業はありませんでしたが、商談会終了後の懇親会では県内各地で活躍している若手農家と交流する事ができました。皆さん経営規模が大きく法人組織で作物栽培・加工に取り組み、横のつながりを大切にしているのが印象に残りました。後日談ですが相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会実行委員会の忘年会で若手メンバーと農業談義をしていると、名刺をいただいた野菜農家は友人だと言われ驚きました。こうした佐野川茶がもたらす縁、紡いで行けば産業としての茶栽培は絶対に続けられると確信しています。



④



⑤



⑥

## ・雑穀栽培終了

2023年雑穀街道普及会解散で藤野の雑穀栽培講習会は終了しましたが、上岩雑穀畑は継続するつもりでした。茶園管理作業の合間に元肥施肥・耕起・播種・間引き・追肥・除草と作業をこなし、8月には栽培講習会参加者に手伝っていただき防雀ネット張りをしました。しかしながらキビ収穫中に熱中症で倒れて雑穀畑の野良仕事を中断、秋の長雨で未収穫の雑穀の穂はカビが生えて真っ白になりました。茶園の秋整枝作業が終わった11月中旬、収穫できなかった雑穀を刈り払い機で片付けて燃やしました(写真⑦)。折しもナマステ156号植物と人々の博物館 Vol.37で西村理事が佐野川での雑穀栽培終了を伝えてくれましたが、パンパンと音を立てて燃える穂を眺めながら無念の思いが込み上げました。野良仕事の合間には収穫できた雑穀の種取りをしました(写真⑧)。いつの日か雑穀栽培講習会を再開するX君に引き継げるように2024年産種子は自宅冷蔵庫で大切に保管します。

1984年自然文化誌研究会冒険探検部活動で取り組んだ学大農場の雑穀栽培、後輩部員が櫛を掘った手製の竝臼で収穫したキビを精白し仲間と餅つきしたのは忘れられない思い出です。ちーむゴエモン年末恒例の餅つき、上岩雑穀畑で収穫した雑穀を餅につき仲間と味わう事は野良仕事の励みでした。蒸し上がったキビは高橋師と高村師がついて黄色い餅になり、参加者に振る舞われました(写真⑨⑩)。多くの方からねぎらいの言葉をかけていただき、9年間続けた藤野の雑穀栽培最後の思い出が出来ました。



⑦



⑧



⑨



⑩

※雑穀見本園で収穫した種子希望の方は宮本透まで

(携帯: 090-2205-8476 e-mail: kwangjuu1980@yahoo.co.jp)

## 冒険学校は「学校」か？（前編）

近代学校の浸透と冒険学校の非学校性

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

### はじめに

コロナ禍において「自粛要請」という言葉が話題になった。「自粛」という自発的な行為を「要請」という矛盾から、マスメディアやSNSではしばしば批判的に取り上げられたことを覚えている人も多いのではないだろうか。

この言葉ほどではないものの、「冒険学校」という事業名もまた、どこか歪な響きを孕んでいる。「冒険」という非日常体験を掲げながら、「学校」というある種の日常性・閉鎖性を想起する名を冠しているからだ。ところが、「冒険学校」と調べると、INCHに限らず多くの実践がヒットする。「冒険」というのは、「学校」で学ぶようなものではなく、むしろその対極に位置するようなことではないのか？

**そもそも、私たちがとりくんでいるのは「学校」なのか**——この問いは、私が学部生のころ、同じく「ちえのわ農学校」という名を冠した活動を展開する、サークルちえのわ部員だった頃から存在している。そこには、「学校でできないことをできる」という側面を重視する立場と、内容は学校教育と異なるという前提を共有しつつも、より学校的な組織化・制度化を進めた方が子どもにとって充実した体験を提供できるとする立場とで、活動をめぐる葛藤（ときに衝突を含む）があったのである。

ちえのわ農学校がどうあるべきか、という問題は現役の学生に任せるとして、今回は、冒険学校が「学校」という名を冠していることについて考えていきたい。

（なお、ここで想定しているのは私が関わったここ10年ほどの冒険学校と現代社会の情勢であり、それ以前については考慮に入れていないことを断っておく）

前編である今回は、冒険学校の実践における学校的な要素を考えるとところから出発して、近代教育における学校とはいかなるものかという教育学的な視点から——なるべく難しい話は避け、手短かに——、「学校」という名前に浸透する「学校」の自明性を論じよう。

そして次号の後編では、近代的な学校とは異なる意味において、「冒険学校」という歪な事業名の射程を見出してみたい。

### 1. 冒険学校の非学校性

一般的な教育系NPOに比べ、自然文化誌研究会の冒険学校が少なからず「非学校的」であることは、ナマステ読者にとっては言うまでもないことだろう。

プログラムに時間は決まっておらず、参加は自由。食事や起床も自由である。「スタッフ」は、あくまで「助言者」として活動することが推奨される。また、「スタッフ」の一部は普段は本物の学校教員だが、彼/彼女らもまた、職場とは異なるかたちで子どもと対峙している。

わたしが知るここ数年間の冒険学校で学校的な要素だと思えるのは、子どもミーティングで参加者に感想を求めるシーンや、夏に行っている修了証の授与くらいのものである。だが、それさえさほど学校的ではない。

修了証は通常の学校でのいわゆる「修了」——所定の課程を収めたという意味で、一定の水準を超えた証——というよりも、参加賞的な位置付けであるし、子どもミーティングでの発言も、学校のように評価に関わるわけでもなく、強制されるものではない（少なくとも私はそう思う）。

**だからこそ、奇妙なのである。なぜ、「冒険村」ではなく「冒険学校」なのか？**

（そもそも「冒険学校」のくせに、顔役は「校長」ではなく「村長」だ）

なぜ、冒険学校は、そのプログラムや理念において「非学校的」な要素を持ち、またそれを独自性としているにもかかわらず、なお「学校」と名乗っているのだろうか？



図 1 文字だけだとさびしいので、冒険学校の非学校的なところの象徴みたいな図。いいよねこの写真。

## 2. 近代教育としての「学校」概念の浸透

INCHIにおける直接の経緯はさておき、教育学的な視点から見ると、その答えは単純である。それは、私たち現代人が「教育の場」をイメージするとき、当たり前のように用いてしまう言葉こそ、「学校」だからに他ならない。

このように述べると、近年、塾をはじめ、NPOや公共の施設、あるいは企業における生涯学習の取り組みなど、学校以外に多くのオルタナティブな教育/学習の場が展開されていることから、教育/学習=学校というイメージは古い、という反論があるかもしれない。

しかし、教育学的に言えば、それはむしろ逆である。

私たちがイメージする「みんなが行く学校」というのは、実は極めて最近登場したものだ。それは、西洋における市民革命のもと国民国家が誕生し、自由と平等を理念とする人権を支えるものとして、公教育制度が整えられたことで初めて成立した。教育の歴史全体から見れば、本来、「学校」以外の学びや教えの場の方が、よほど普通なのである。

オルタナティブな学びの場が「学校と異なる教育/学習の空間」として認識・評価されることは、むしろ「学校教育」が私たちにとっていかに当たり前のものとして浸透しているかを、浮き彫りにしているのだ。

このことはINCHIを含め多くのオルタナティブな教育/学習の場が、「学校」という名前を冠している理由とも関係している。野外活動に限定したとしても、「学校」ないし「教室」という名前を冠した事業を展開するNPO法人は多い(試しに、NPO キャンプ 学校とでも調べてみてほしい)。それらは、制度的にもそして事業内容的にも、必ずしも学校的であるとは限らないに関わらず、「学校」という名前を当たり前のように名乗っている。それほどまでに学校という概念は、近代以降、「教育/学習の場」を指す普遍的な言葉として浸透しているのである。

そのような自明性を孕んだものとして捉えてみると、いかに非学校的に——あえて言えば「冒険的」に——見えたとしても、「冒険学校」にもまた、「学校的なもの」が深く浸透していることが見えてくる。

例えば、保護者-子ども-スタッフの関係、基本的なジェンダー概念、保健や食事をはじめ分掌化された組織体制など、実は、冒険学校は多くの部分で学校的な構造を持っている。こうした制度的な側面だけでなく、いくら「助言者」として定位しているとはいえ、冒険学校における私たちの行動には、知らず知らずのうちに、学校的な振る舞いが浸透している。

こうした冒険学校の「学校性」は、いわば、「冒険の学校」としての側面ということができるだろう。他方で、活動内容や体制に非学校的な要素を多分にはらみながらも、冒険学校が「学校」という名を冠していることは、「冒険の学校」というストレートな意味とは異なる、ある種の発想の転換を含んでいるように思われる。

(次号へ続く)

## ○ ご案内

(会員の長濱和代さんからの情報提供です。)

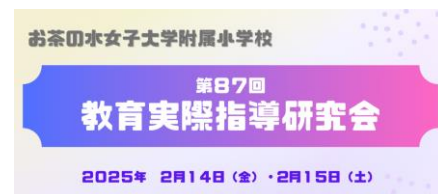
お茶の水女子大学附属小学校では、2025年2月14日(金)・15日(土)に公開研究会を開催します。お茶小では年間を通じて多くの研究会があります。2月の研究会は規模が大きく「教育実際指導研究会」として、今年度で87回目を迎えます。昨年度は、2日間で1000人以上の参加者をお迎えしました。子どもたちの学び姿を通して研究を公開し、参加者の皆さんとよりよい教育のあり方について議論する研究会です。

詳しくは、こちらのホームページをご覧ください。

○お茶の水女子大学附属小学校 [www.fz.ocha.ac.jp/fs/](http://www.fz.ocha.ac.jp/fs/)

○特定非営利活動法人 お茶の水児童教育研究会 [www.npo-ocha-fs.org](http://www.npo-ocha-fs.org)

みなさまのご参加をお待ちしています！



## ○ 自然文化誌研究会 50周年記念について

前号でもご案内しましたが10月4日(土)に、東京学芸大学附属環境教育研究センター(農園)での開催予定で進めています。内容について、次号のナマステ(3月中旬発行予定)にて大きくご案内できると思います。また、50周年記念誌の発行をはじめ、他にも50周年記念の動きをしていく予定です。

## ○ 事務局の麗しき日々

- ・松井サキちゃんがスタッフデビューしたもよう。
- ・ハッシーは4月から教員になるもよう。
- ・篠永くんの息子たちが冒険学校デビューしたもよう。
- ・ノリは就職が決まったもよう。卒論は格闘中のもよう
- ・あべちゃんは4月から大学の教員になるもよう。
- ・小菅の湯は2月から火曜日が定休日になるもよう。

## ○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は

年額(1~12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員:10,000円 一般会員:5,000円 学生会員:3,000円

賛助会員(個人・団体):10,000円 家族会員:6,000円

植物と人々の博物館友の会会員:3,000円

雑穀街道特別会員:1口1,000円から

・成合基金(冒険探検基金):「成合基金」とご記載してください。

・寄付:「寄付」とご記載してください。

①郵便振替口座:00100-2-665768

口座名:特定非営利活動法人自然文化誌研究会

②ゆうちょ銀行:店名00八 普通口座

口座番号9479450

口座名:特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 157号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌  
<発行日>2025年1月20日  
<編集>自然文化誌研究会 事務局  
<発行> 特定非営利活動法人

**自然文化誌研究会**

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村3337-2

TEL:090-3334-5328(事務局 黒澤)

E-mail: [npo\\_inch@yahoo.co.jp](mailto:npo_inch@yahoo.co.jp) ←変更しています!!

H P: <http://www.npo-inch.ppmusee.org>